

〈私の研究〉

オニールとともに
近田小一

私がユージン・オニールの研究をはじめたのはこの劇作家が一九五三年晩秋に没する少し前であった。その当時オニールについてのまとまった研究書といえ、パンフレット形式のものを含めて雙手で数えられない程度であり、その他の参考文献も同様の状態であった。

オニール研究者にとつてのこのいわば草分け時代は彼の死後も数年間続いたが、一九五〇年代の終わりのころから六〇年代にかけて堰を切ったように研究書、評論集、伝記類があらわれてきた。

このことは私たちにとつてありがたいことだが、以前とは異なつた困難さを味わうようになったのも事実である。というのは「アメリカの現代演劇を開化成熟させた始祖」としての位置づけ以外には、オニールとその作品についての大方の視点や評価は千差万別であつて、どの作品一つにしても、それを考えようとす

ればこれら大部の關係文献を研究資料として一わたり検討することをまず要求されるからである。それと共にオニール研究の質的な面の発展——その視野の拡大——が一九六五年ころから目立ってきている。つまりオニールの業績をアメリカ文学のみならず広くアメリカの文化、社会、歴史の脈絡の中でとらえようとする試みである。今日では私たち研究者にとつてこの二つの要請に何らかの形で応えようとする姿勢と努力がなくてはみのある仕事がおぼつかなくなつてきている。

こうした位置にたつてオニール劇はどのように攻められるか。これには心理学的な解析法が一つの有効な手法であり、私の関心も主としてここにある。だが心したいことはオニールはフロイディアニズムの極めて濃厚な作家ではあるが、いわゆるフロイド主義の使徒ではないことだ。彼はその作家活動の重要な一時期にフロイド的な洞察を何よりも人間と人生の内面的な探究に意欲的に援用したとみるのが妥当であろう。従つてオニールとフロイディアニズムのかかわり合いをもう一度洗い直すこと、そしてその劇作品に対する心理学的解析法の効用と限界を注意深く見きわめながら一わたりオニールの全作品にこれを適用していくことを私は心がけている。

そこでオニール劇の全貌をこの手法でとらえることができるかどうか。この点私は樂觀しているわけではない。彼の劇には独特な小宇宙が存在しているからである。

たとえば「永人來たる」(一九三九年作)に登場するアイスマンはおおよそ次のようにその妻殺しの理由を告白している。「余りにも私を愛しどんな私の裏切りにも私を許してくれる妻を私は許すことができなくなつたのだ。……私がいつかはまともになるだろうと願いつづける憐れな妻をそんなたわけた夢から、そしてこの私から救つてやうのためだつたのだ」。この心境の吐露は劇の構成の中にまことにピツタリとはまり込み、逼真的な効果を生み出している。しかしこの異様な意識そのものは私たちの日常的な生活感覚の遠くおよばないところであり、また尋常なロジックのつみ重ねで解明できるものではない。そしてこの種の意識ないしは情念は形は違つても他の多くのオニール劇につきまとい、中心的な行動を呼びおこしたり、基調的なムードとなつてオニール劇の重要な要素となつていゝものである。これらを前にして私は今まで幾度か長嘆息してきたものであるが私が現在探つてゐる手法がこの究明にも有効にはたらくならば幸いなことだと思つてゐる。

(大学工学部助教・アメリカ文学)